

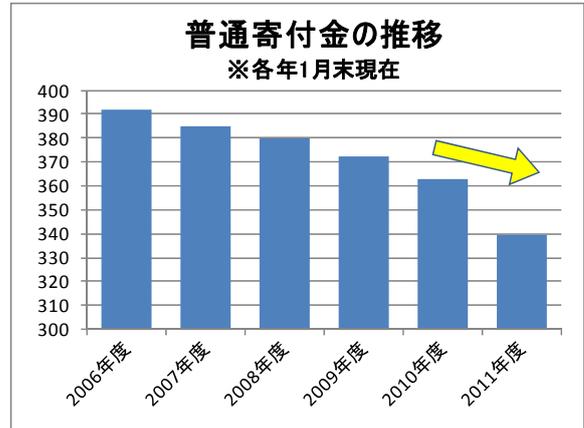


ハイライトよねやま143

1 寄付金速報 —2012年下半期も厳しいスタート—

1月までの寄付金は前年同期と比べて3.9%減、約3,800万円減少の9億4,500万円となりました。普通寄付金が6.4%減、特別寄付金が2.5%減でした。

普通寄付金については、1月末現在、全クラブの68%にあたる1,548クラブからご納入いただいておりますが、昨年同期(79%、1,822クラブ)と比較すると、納入状況に遅れがみられます。また、地区内全クラブのうち、普通寄付金を送金いただけないクラブが4割以上にのぼる地区が9地区あります。ご確認いただき、お早めにご送金くださいますようよろしくお願い申し上げます。



ご存じですか？ 普通寄付金も税制優遇の対象です！

毎年10月末までに
ご申請ください！

米山奨学金への寄付金は、特別寄付金(任意寄付)だけではなく、普通寄付金(半期に1度、クラブ会員数分を送金いただく寄付)も税制優遇の対象となります。普通寄付金については、毎年10月末までに、その年の1月と7月分をクラブ事務局から申請していただくことで、申告用領収証を発行することができます。

2 新規米山奨学生が決定！

新規米山奨学生の面接選考が各地区の選考委員会によって行われ、2012学年度合格者が決定しました。1,550人の応募に対し、648人が合格(海外学友会推薦奨学金¹は現在選考中)。奨学金プログラム別の合格者数は、博士・修士・学部課程奨学金が616人、地区奨励奨学金が16人、クラブ支援奨学金が11人、2012学年度よりスタートした海外応募者対象奨学金²(個人応募による)が5人です。

国籍・地域別の割合は、中国53.3%(前年度49.8%)、韓国17.6%(17.0%)、台湾4.0%(6.2%)、その他が25.2%(26.9%)です。*前年度の数字はハイライトよねやま132号当時

JASSO(独立行政法人日本学生支援機構)によると、昨年5月の調査では、日本国内の留学生在籍数は前年の2.6%減と発表されましたが、中国・韓国籍の米山奨学金申込数は昨年より増加し、合格割合も同様の傾向となりました。これらの人数は、他奨学金合格による辞退者が出ることなどにより変動する見込みですが、今回の合格者と昨年度からの継続奨学生171人を合わせた約820人が、2012学年度奨学生となります。

奨学金の種類	合格者
学部・修士・博士課程	616人
学部課程	166人
修士課程	292人
博士課程	158人
地区奨励	16人
クラブ支援	11人
海外応募者対象	5人
海外学友会推薦	選考中



※1 海外学友会推薦奨学金: 海外の米山学友会(台湾・韓国・中国)が日本留学予定者を募集し選考する。博士号を有する上級研究者が対象。採用枠は各学友会につき1人。

※2 海外応募者対象奨学金: 日本留学が決定している海外在住の外国人が応募できる新制度。応募者の受入校が所在する地区が採否を決定する。

3

感謝の心を込めて絵画を寄贈 — 第 2640 地区 —

中国・広東省の五邑大学准教授として教鞭をとりながら、画家として活躍する米山学友、賈金柱さん（中国 / 1997-98 / 御坊 R C ・ 和歌山東 R C ）が来日し、2月2～6日の5日間、和歌山市内で個展を開催しました。



和歌山東 RC に作品寄贈した賈さん(左)と田原会長



個展会場を訪れた地元高校生たち

賈さんは昨年の東日本大震災、そして台風 12 号による災害に心を痛み、「私も何かしたい、何かできるはず」と、9 年ぶりの来日を決意。世話クラブの和歌山東 R C のほか、和歌山 R C、そして米山奨学会事務局のために 3 点の作品を寄贈してくださいました。描かれているのは、世界遺産にも登録されている、同省開平の高層楼閣（碉楼）を含む村落群。富を築いて故郷に戻った華僑たちが両親への恩返しのために建てたと言われる碉楼の風景は、「私のロータリーに対する感謝の気持ちそのまま」と、賈さんは言います。今回の個展は地元メディアにも取り上げられ、母校の和歌山大学学長をはじめ、東京や長野など遠方からも多くの人を訪れました。当時、賈さんと家族ぐるみの付き合いをしていた和歌山東 R C の田原久一会長は、「個展を開くような立派な画家になられ、世話クラブとして光栄だし誇りに思う。今後も懸け橋として頑張って欲しい」と、エールを送りました。

4

上海企業から被災地への発電機提供を学友が橋渡し

このたび東日本大震災復興支援にと、上海の電力設備会社（上海科泰電源公司）がディーゼル発電機ユニット 10 台を宮城県気仙沼市に寄贈。その橋渡し役を務めたのは、立命館大学教授で第 2650 地区米山学友会会長の周瑋生さん（中国 / 1993-95 / 京都洛中 R C ）です。

震災直後の 3 月下旬に発電機の寄贈を決めた上海側から依頼を受けた周さんですが、当時は被災地も混乱を極め、「受け入れ先を見つけるのに難航した」といいます。手を尽くして探す中、第 2650 地区米山記念奨学委員長の岩橋忠昭氏の協力で気仙沼 R C と連絡を取り、無事に気仙沼市での受け入れが決定。12 月 10 日に同市で開催された贈呈式には、上海企業の代表 4 名や気仙沼市長のほか、気仙沼 R C 会長をはじめ、岩橋氏や周さんなど、実現に協力したロータリー関係者も出席しました。今回寄贈されたディーゼル発電機ユニットはすべて、気仙沼の主要産業である漁業復興のため、漁船関係の電力安定供給に役立てられます。

周さんは、立命館大学政策科学部で被災地復興のための政策研究チームを組織、また、昨年設立された日本ロータリー E クラブ 2650 の創立会員として、ロータリー活動にも積極的に参加しています。「被災地はまだ大変な状況で、息の長い支援が必要。政策科学の研究者として、また、ロータリアンとして、これからも被災地の復興のために尽力していきたい」と語っています。



寄贈式で固い握手を交わす周さん(右)